

舞踊文化

ETC

No.34

目 次

- 神と靈魂 諏訪 春雄 ——— 1
- 松浦佐用姫の「比礼振る」伝承 丸茂 美恵子 ——— 3
- 中国 石郵村郷舞の舞班にみる「ほかひびと」的要素
伊藤 好英 ——— 7
- 長野・新野の雪祭り 田中 英機 ——— 10

神と靈魂

諏訪 春雄 学習院大学名誉教授

神と靈魂はどのような関係にあるのか。靈魂と神の関係を推測させる信仰は中国少数民族のホジェン族の信仰である。この民族が信じる三つの靈魂のうち、人の生死に関わる第三の靈魂フィエヤークーを生み出したのは神であるという。つまり、神は靈魂より上位の存在で人の生死を管理する。

また、『春秋左氏伝』が伝える古代漢民族の靈魂と神の関係もホジェン族とほぼ同様であり、靈魂の働きが精妙になると神になるという。小山修三『縄文学への道』は、宇宙をつくり、生命をつくり、人をつくり、部族をつくった創造主としての神が日本の縄文社会に存在したという。またアニミズムは中国語で「万物有靈論」というように、この世のすべての存在に靈魂を認める信仰であるが、先の中国の少数民族の靈魂観は人間中心で、わずかにある種の動物に靈魂を認めるだけである。靈魂はどのようにして神となるのか。台湾原住民の信仰に探ってみよう。

台湾ツォウ族が信仰する神は善神と悪神の二種。善神は上神と下神に分かれる。「天は生み地は育てる」が神の本質を示す。天上界にあって生命を司る神が上神で、創造神(大神)・司命神・軍神がいる。下神は、下界にあって、生命の存続と発展に必要な栄養と環境を司る神。土地神・河神・粟神・稲神・獵神・部落神・家神などが属する。悪神は単独に存在して系統をなさない。この分類を前の靈魂と神に比定すると、上神が神であって、下神は靈魂であると考えられる。神も靈魂から進化し、直接に生命を生み、育てる靈魂が上位に位置づけられている。しかし、すでに中國大陸北方の天の神の影響があつて、天の神は上位、地の神は下位とみなされている。悪神は人の生命に危害を加える神で巫師だけがその害を払うことができる。この悪神も靈魂である。

神はどのようにして動く認識されたのか。

渡り鳥、回遊魚、冬眠動物が決まった季節に姿を見せる現象は本体そのものの移動で靈魂の移動ではないが、同一の神の来訪活動とみなされ、複数の固体に宿る一柱の神という観念を形成した。

繰り返す自然現象



自然の繰り返しも、これらに神の姿を見ていた古代人には神そのものが動くように観念された。

諏訪の御柱



人間による移動が神自身の移動に変わる。諏訪の御柱、伊勢神宮柱曳き、神社の神輿渡御などである。複数の神が同一の信仰対象となる例は山岳信仰である。

アメリカ宗教学者ロバート・ニーリー・ベラーに宗教五段階論（1960年代）がある。

宗教を、原始・古拙・有史・初期近代・現代の五期に区分した。原始は、生活している人間と神が一体化しており、神話世界と人間世界も一体化している。社会の誰もが宗教人であり神は常に人とともにいて、神を祀るための専門的な役割の人はいない。やがて神の世界と人間の世界が分離し、人間は必要に応じて神を呼んできて、用が済めば神を送り返す。そのために神を招き、送り返す特殊な力を持った職業的、あるいは半職業的な人シャーマンが誕生した。

この五段階論は、単純進化論とせず、同一社会に並存することがあると考えると、日本にも適用できる。「神が動く」とは、ベラーの古拙の段階で起こった現象である。

青森恐山シャーマンのイタコ



シャーマンは人と神を仲介する専門的宗教人であり、仏教渡来後僧が加わる。

脱魂(エクスタシー)型と憑依(ポゼッション)型に分けることができる。

脱魂型は次のような特質を持つ。霊魂が身体をぬけ出して神の許へ行く、タバコ・麻薬・粉末香などでトランスに入ることが多い、採集・狩猟民、牧畜民に多く、巫病・修行・世襲で入巫する、歌舞・芸能を生まない。

対する憑依(ポゼッション)型は、神霊が巫の身体に入り込んでくる、自身でトランスに入ることが多い、農耕民社会にひろがり、巫病・修行・世襲で入巫し、歌舞・芸能・芸道の母胎になる。

松浦佐用姫の「比礼振る」伝承

日本大学大学院講師 丸茂 美恵子

歌舞伎舞踊の娘の踊りはクドキで縮緬の手拭を用いて終盤に特有の振りをみせるものが多い。今回は、振りの特徴からその源流・原義について古代への想いを馳せてみよう。

○松浦佐用(まつらさよ)姫伝説

古代の『肥前国風土記』『日本書紀』『万葉集』に佐用姫の伝説はみえる。佐賀県唐津市にある鏡山稲荷神社境内の石碑に刻まれた、山上億良の和歌(『万葉集』)は、

- ・松浦潟 佐用姫の兒が 領巾振りし 山の名のみや 聞きつつ居らむ
- である。ほかにも『万葉集』に佐用姫伝説は数々詠まれている。
- ・遠つ人 松浦佐用姫 夫恋に 領巾振りしより 負へる山の名 (大伴旅人)
 - ・山の名と 言ひ継げとかも 佐用姫が この山の上に 領巾を振りけむ (旅人)
 - ・万代に 語り継げとし この岳に 領巾振りけらし 松浦佐用姫 (旅人)
 - ・海原の 沖行く舟を 帰れとか 領巾振らしけむ 松浦佐用姫 (億良)
 - ・行く舟を 振り留みかね いかばかり 恋しくありけむ 松浦佐用姫 (億良)
 - ・音に聞き 目にはいまだ見ず 佐用姫が 領巾振りきとふ 君松浦山 (三島王)

このように、古より佐用姫伝説は人の心に響く悲恋物語であった。

それでは、佐用姫伝説はどういう話なのか。『万葉集』によると、肥前国松浦に住んでいた佐用姫は、朝廷の命令で任那救援のために出征する大伴狭手比古と契り、離別に際して山に登り領巾を振って別れを惜しみ、その山を領巾振山というようになった、という(上記下線部分参照)。



鏡山稲荷神社境内の石碑
* 鏡山=領巾振山の別名を持つ(写真撮影:筆者)

○「振り」の原義と「比礼振る」伝承

日本には、「振り」という特別な意味を持つ言葉がある。一体、「振り」とは何であろうか。郡司正勝氏は、

本来「ふり」には、神威発動の意があった。(中略)古代「ひれ」を振ったのは、魂をふり付け、振動させる呪術的所作であった。招魂・鎮魂を行う巫女(猿女君)は、ひれをふり動かし、魂を招き、また邪悪なものを退けた。それが「魂振」である。

(「振と物真似 ―「ふり」の始原」『郡司正勝 刪定集 3 幻容の道』所収)

と述べた。このように「振る」は動きの根本的な発動を意味し、「魂(たま)振り」「なみふる(地震)」「比礼振る」など神霊の発動を根源とした。

佐用姫が領巾を振りながら船を見送ったのも「比礼振る」であり、郡司氏は「袖や袂が恋の表情をすることは「比礼古留山」以来の民俗伝承であった。」(『おどりの美学』「袖と袂と裾の美学」281頁)と、その展開を歌舞伎舞踊のクドキにみる袖や袂の扱いに求めた。

○娘の踊りにみる手拭を〈ヒラヒラ散らす〉振り

私は、歌舞伎舞踊の「汐汲」「娘道成寺」など娘のクドキに手拭を用いるのは「振り」という言葉の原義とその精神を引き継いでいるからだと考えている。特に動作のエッセンスとして〈縮緬の白い手拭をヒラヒラ散らして、入れ込み回りし、手拭を掲げて極る〉は大変特殊な振りである。それらを歌詞で示し〈 〉内に振りのエッセンスを記した(筆者博士論文「日本舞踊における娘形技法の実証的研究 - 比較譜 - 」参照)。

- ① 長唄「藤娘」〰片便り〈入れ込み回りし、手拭を掲げて極る〉
- ② 長唄「汐汲」〰水も漏らさぬなかなかかは〈手拭をヒラヒラ散らして、入れ込み回りし、手拭を掲げて極る〉
- ③ 長唄「鷺娘」〰余る色香の〈手拭をヒラヒラ散らす〉
- ④ 長唄「娘道成寺」〰露を含みし桜花 さわらば落ちん風情なり〈手拭をヒラヒラ散らして、入れ込み回りし、手拭を掲げて極る〉



長唄「娘道成寺」クドキ*手拭を掲げ持って登場する。
(写真提供: 木村多紀氏)

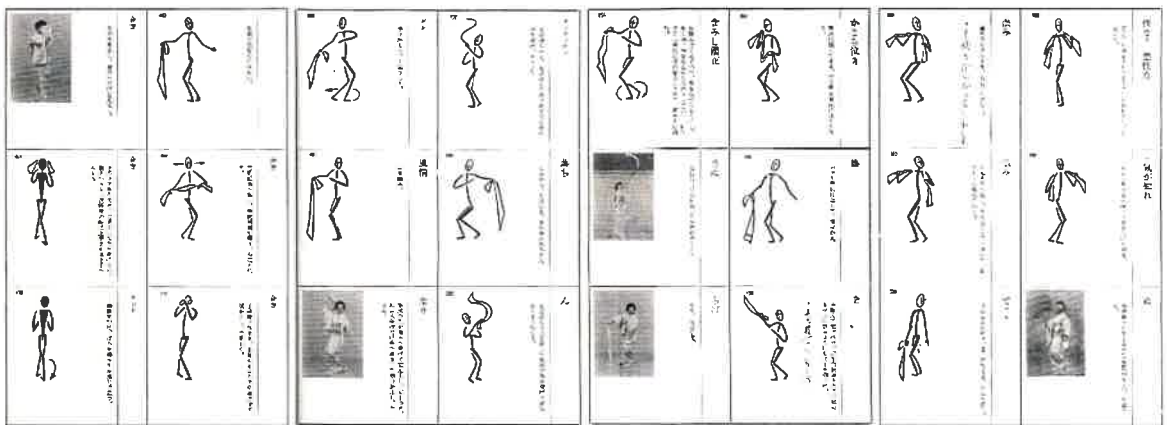


清元「幻お七」*浄瑠璃地でも縮緬の手拭を用いる演目があるが、クドキの終盤に手拭を散らす振りはみられない。(写真提供: 筆者)

○「娘道成寺」の手拭を〈ヒラヒラ散らす〉振り

前項の振りのフルバージョンとも言えるのが「娘道成寺」になる。そこで、対象となる「恨み恨みて〜風情なり」の振りについてさらに説明する。なお、次に記す振りは藤間流をもとに花柳流譜本も参考にした。

- ・「気が知れぬ」半四郎振りのあと手拭を右手で握ったまま開けて、鐘を見上げる。
- ・「恨み恨みて」鐘を恨みながら下手へ歩き、手拭をだんだん右へずらし、手拭を右手に引き握り、鐘を見上げ、手拭を目に当て泣く。
- ・「露を含みし桜花」ハッと手拭を下ろして気を変え、手拭の先を上方へ放るようにして振りながら回り歩く。
- ・「さわらば落ち」手拭を右手で持って斜め上手向きで手拭の先を投げヒラヒラさせ退がり、下手向きでその逆。
- ・「ん 風情なり」入れ込み回りして、後ろ向きで手拭の中程を飛ばし持ち、右足踏み前向き、手拭の先を後方に投げて、左手突き袖で袖口返し、おひねりで極る。



花柳流舞踊譜本 長唄「京鹿子娘道成寺」より転載(78～79頁・右から左へ)

○琉球舞踊「花風」のティサージ（手巾）

郡司氏は、

琉球舞踊の女踊のうちの「花風」には、遊女が舟で遠ざかる男を見送って、右手に傘をもち左手に「手巾」という花染の手布を振って名残を惜しむ艶麗な所作があるが、遠く日本民族の古代に領巾を振って石になった松浦小夜姫の伝説のあるのを憶わせずにはおかないものがあつた（前掲書「生きている手拭」261～262頁）

と述べた。「花風」は雑踊の一つだが、「三重城にのぼて手巾持上げれば 速船の」と左手にティサージを持ってかざす振りはまさしく佐用姫伝説とオーバーラップする。

手布・手拭は袖の延長としての性格を秘めていると郡司氏は述べ、さらに折口信夫の説にしたがって、手拭に魂を呼ぶ呪物の意味があるのを忘れてはならないとした。

○韓国舞踊「サルブリ舞」のスゴン（手拭）

「サルブリ舞」はクッ（巫堂が行う儀式）に起源をおき、巫女がサルブリ音楽に合わせて神懸りする手段として踊られた。一般的に「サルブリ舞」は長い絹のスゴンを持って踊る即興形式の独舞で、白い衣服を着た舞踊手がスゴンを操るように伸ばしたりして、踊りながら節制された曲線美を美しく表現する。

表面にシボのある絹織物の縮緬とは寸法も風合いも違うが、長くて柔らかい薄絹のスゴンに「比礼振る」伝承を憶えるのは私だけであろうか。



琉球切手「花風」*琉球舞踊の雑踊の傑作で切手にも取り上げられた。



「サルブリ舞」大韓民国 国立国楽院公演より
*韓国舞踊の最も代表的な民俗舞踊である。

<裏表紙「対象の流派と年代」解説>

「ORCNANAプロジェクト」とは、文部科学省による私立大学学術高度化推進事業の一つであるオープン・リサーチ・センター整備事業の選定を受けた日本大学芸術学部芸術研究所「日本舞踊の教育システムの文理融合型基盤研究並びにアジアの伝統舞踊との比較研究」（平成17～21年度）の略称である。このプロジェクトは6チームに分かれていたが、中心となったのがモーションキャプチャ（人間の動きを多方面から捉え、コンピュータで画像処理し、その動きを3次元で表示できる装置）を用いた科学的かつ客観的な日本舞踊の動作研究である。

日本舞踊には流派が多数存在し、それぞれ伝承している振が違う。そこで、歴史的に由緒ある代表的な5流派を対象に各流派に所属する20名の女性舞踊家に協力していただいた。そして、特殊なボディースーツを着て「娘道成寺」クドキの後半部分を踊っているところをモーションキャプチャで計測、動作データを取得し多岐にわたる研究を実施した。

また、同じ色の着物を着て同じ箇所をDVD収録した意図は、学会発表の際にモーションデータだけでは国内外の研究者には日本舞踊のイメージが伝わらないのでモーションデータとシンクロナイズさせて表示するためであった。しかし、”Evaluating methods of traditional dance : Case study in Nihon Buyou” (CORD Special Conference : GLOBAL PERSPECTIVES ON DANCE PEDAGOGY, 2009.6.27, Leicester, De Montfort University) などこの動画を活用した研究も実践できた。裏表紙「対象の流派と年代」はそのDVD収録の静止画像である。

中国 石郵村郷儺の儺班に見る「ほかひびと」的要素

伊藤 好英 藝能学会会長

中国には、宮中で行われた鬼やらいの行事(儺戯)の他に、民間で行われた儺戯があり、郷儺あるいは単に儺と呼ばれている。郷儺は、中国の極めて広い地域の漢民族・少数民族の間に現在でも数多く行われている。そのうち、江西省南豊県石郵村(漢族の村)の郷儺を、私は2002年に廣田律子氏の調査に随行して見学する機会を得た。その儺は、儺班と呼ばれる8人からなる神人団によって演じられるものであったが、私はその集団に、折口信夫が「国文学の発生(第二稿)」で論じた「ほかひびと」の面影を見た。以下、そのことについて述べてみたい。

儺班は俗に「弟子」と称され、加入の順番によって上から大伯・二伯・三伯・四伯・五伯・六伯・七伯・八伯と呼ばれる。この儺の実演者を「弟子」と呼ぶのは、彼等の上に「頭人」と呼ばれる、石郵村の呉氏一族が儺を管理する組織があって、儺班は、「頭人」の任命・依頼によって儺を行うからである。いわば、呉氏一族は儺のパトロンであり、儺班(この中に呉姓の者はいない)はそのパトロンに仕える芸能団であると言える。

石郵村の儺は、旧暦正月の元日から17日まで行われる。その大略は以下のとおりである。

[起儺] 元日に儺を開始する。儺班は、儺神廟の天井裏に収納されている儺仔の人形と13個の仮面を全部下ろして、祭壇正面に儺仔の人形を置き、後ろの2本の架に仮面を掛けて神招ぎの儀式を行う。仮面の名称を架上の順番で述べると、上段左から雷光・鍾馗・儺婆・儺公・関公・開山・開山、下段左から小鬼・紙銭・一郎・二郎・大鬼・大鬼である。

以下の演儺・捜儺において、儺班のメンバーはこれらの仮面を被って演戯を行う。

[演儺] 元日は儺の創始者とされる呉太尹公の家でのみで行い、2日から9日までは村内の各家で、10日から16日までは他村の各家で行われる。祝福と除災とを目的としている。儺班の出発・帰還の地点は儺神廟である。

[捜儺] 16日の夜から翌日の暁まで、開山・鍾馗・大鬼が激しい音響とともに村内の各戸を廻り徹底的に鬼を捉えて歩く。儺行事のクライマックスである。

[円儺] 捜儺が終った日の夕方近く、儺班は儺仔の人形と13個の仮面を箱に入れて河原に向かい、地面にそれらを約束の並べ方で安置し、その周辺を呪術的な方法で廻る。

このような手順で行われる儺の目的が、全体として見ても祝福と除災とにあることは明白である。除災の性格は「捜儺」に強く見られる。祝福の性格は、特に「演儺」で儺班が、村内の東西の祠堂や、村外も含めた各家々の入口で唱える「詩」の内容に、はっきりと表わされている。

ところで、儺班の行動に私が「ほかひびと」の印象を強く持ったのは、彼等が他村に出かけた時である。われわれは2村だけ彼等の遠征に同行した。両村とも比較的遠いところにある村（それぞれ片道五キロ以上）だったので、各村での演儺の時間を含めてそれぞれ1日がかりの旅程であった。儺神廟を発つとき、儺仔の人形と仮面とは2つの箱に収められ、1人が天秤棒でそれを担いで彼らの旅が始まる。石郵村内の神の移動にもこの箱は使われるが、特に他村に向けての移動において、私は神の移動のためのこの箱に、「ほかひ」の語の原義を意識せざるを得なかった。「国文学の発生（第二稿）」で折口が、日本における「古い魂筥の思想」について述べた柳田國男の「うつぼ」と水の神」を受けて、「ほかひ」という容器の名は、祝福人である「ほかひびと」（祝く人＝ほかふ人）が神霊を運ぶために使ったことから出たものであることを説いて、「ほかひと言はれる道具の元は、巡遊伶人が同時に漂泊布教者であつた事を見せて居り」云々と述べていたからである。



他村へ向かう儺班（筆者撮影、以下同）

ところで石郵村内でも他村でも、儺班が到着すると、主人は儺仔を自家の^{な し}^{ちやうどう}庁堂に迎えて神棚の前の祭壇に安置する。そして仮面を使った演儺は、その祭壇の前で行われる。この様子から窺うに、箱で運ばれた神霊のうち、儺仔の人形こそが、「儺神」を第一に象徴するものであると言えよう。儺と言えば一般に、開山・鍾馗・大鬼などの仮面神が主役であると考えられているが、石郵村の場合、儺仔の人形が極めて重要な役目を果たしているのである。もともと演儺のうち、「儺公儺婆」と呼ばれる演目では、儺仔の人形が儺公・儺婆の子供の役割をする。そこでは儺公・儺婆を演じる役者がこの人形を手にとって、あやしたりおしっこをさせたりする。また、子授けを願う家では、この人形は子宝の象徴ともなる。



家の入口で祝福の「詩」を唱える儺班



家の庁堂の祭壇に安置された儺仔



庁堂での演儺 大鬼・小鬼

最後の「円儺」で、河原に複雑な配置で並べられる人形と仮面、その中心にあるのがやはり儺仔である。儺班はこの人形を起点として、それらの仮面の間と周囲を廻る。この廻ることで、神々（人形・仮面自体）は彼等がもっていた世界に帰ってゆくものと思われる。こうして17日間に及ぶ儺の行事は終り、世界は更新される。そしてそのことで、神を持ち運び、神を演じる「ほかひびと」=儺班は、その役割を終えるのである。



円儺で地面に置かれた儺仔（中央）・儺公（右）・儺婆（左）

参考文献: 廣田律子・余大喜『中国漢民族の仮面劇』(木耳社、1997)

廣田律子『鬼の来た道』(玉川大学出版部、1997)『中国民間祭祀芸能の研究』(風響社、2011)

民俗芸能のいま / 長野・新野の雪祭り

「第33回全税共 人と地域の文化賞受賞 / (公財) 全国税理士共栄会文化財団主宰」

田中 英機 くらしき作陽大学客員教授

元旦を大正月、その十五日を小正月と呼んだ。小正月は、新年初の満月の日、昔びとにとっては、実質実感の正月であった。信州下伊那の「新野の雪祭り」は小正月の、ことし一年の豊穡と幸運を祈る、祭りと芸能に興奮する時でもあった。雪の結晶は、稲の小さな白い花とそっくり同形で、雪の豊かさは稲の稔りの豊かさを予祝するものであった。

今年の小正月、十数年ぶりに阿南町新野を訪れた。賑やかで華やかさを秘めた、底力を持った山里であったが、このたびは全く違った、集落のメインストリート商店街に人影はなく、人声も物音もしない無気味な静けさに沈んでいた。たった十年ほどの間の、この変貌。過疎化、少子高齢化の人口激減に歯止めは効かなかったという。賑わいの商店街のなかに5、6軒もあった旅館ホテルは、今や一軒のみに。

それでも14日の深夜、大松明に火の入る頃、来訪神「さいほう・もどき」の主演登場の時には、神社境内は見物人とカメラマンであふれた。村を離れた人たちも、この時ばかりは戻って来るという。次々登場する翁たちの神語りを聞き、たわいない問答に笑い、獅子や鬼たちとも出会って、はじめて、新しい歳を迎える気分となるのであろう。

さて、地域社会の人口激減問題は、貴重な民俗文化の消失と直結する。その問題意識を具体的に問う、新鮮な論文集が公刊された。小川直之編「伝承文化研究の現代的課題」(清文堂、3月刊)。小川の総論問いかけと、桜井弘人の遠山霜月祭変容論、大石泰夫の民俗芸能継承への提言など14人の研究・提言に耳を傾け、これを社会問題(課題)にまで引き上げ、文化財保護法の民俗文化財、無形文化財の条項検討にまで発展させたものである。

(人と地域の文化賞は、去る2月21日に帝国ホテルで贈呈式がありました)



金田 誠 写真集『乱声—南信州 新野の雪祭り』(自費出版)

金田 誠さんは新野の出身。
在東京で、雪祭りは心のふるさとという。

(写真集問合せ / 090-3689-6079 金田)

対象の流派と年代

50代



40代



30代



20代



藤間流

西川流

花柳流

若柳流

坂東流

(注) 流派名は単なる流派の名称ではなく、その流派が伝承する芸系統を示している場合も含んでいる。
 *「娘道成寺」では各流派ともクドキの終盤で、鐘への恨みを募らせたあと泣き、気を変えて右手に握り持った手拭の先を振りながら回り歩く。写真は「へ恨み恨みて」で鐘への恨みを募らせる直前の極り。
 (ORCNANAプロジェクト モーションキャプチャ研究より 写真提供: 丸茂美恵子/本誌6頁参照)

舞踊文化 E T C No.34 2025年5月23日発行

発行人 三隅 治雄 編集人 黛民族舞踊文化財団事務局

〒107-0052東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639

ホームページ <http://www.mayuzumi.or.jp>

一般財団法人黛民族舞踊文化財団